

特集 基本的には生分解性マルチ

農業生産のあり方が大きく変化をしている。これまでの農業を担ってきた農家に代わり企業による農業生産が増えている。その代表のひとつがイオンアグリ創造(株)直営の各地のイオン農場だ。全国の散らばり、その数は20、経営面積は3500haに及んでいる。イオン農場のよき存在がこれからの農業を支えるのだろうか。現代農業は各種農業機械とともに、数々の資材なしには生産を維持することはできない。既存の農業用マルチフィルムも必要不可欠な資材だが、使用後に撤去し処理するのに時間とコストがかかる。トウモロコシなどは根が絡む。面積が大きくなれば負担はさらに大きくなる。イオン農場ではこれらにどう対応しているのか。イオンアグリ創造(株)の福永庸明社長は「農場で使うマルチフィルムは基本的には生分解性フィルムを使っています」と語っている。

熟練と革新の両輪で

軽労化実現に各種資機材が

農業のさらなる軽労化の実現が求められている。近年、注目されているのは間違いなく、1本1本伐採する軽労化の実現のためには、生分解性マルチフィルムだ。普及率は、も明らかだ。各種の資機材がある。軽10%ほどだといわれる。同社は今年で創業11年が第一歩であった。現在の労化のために活躍するのが、これからの農業経営目を迎えた。木々が生い茂る2・6haの耕作放棄地を、建設機械に乗り込んでは、北海道から九州にかけ20カ所、計350haの直営農場があり、全に成長した。



現在は人を育てることに力を入れる福永社長



広々とした日高農場のズッキーニ畑



ここで生分解性マルチが使われていた



トウモロコシの根がマルチに絡んでしまう



マルチフィルムの除去には労力がかかる

れば、既存のマルチフィルム処理に時間と手間をかけられないため生分解性マルチとなる。環境負荷の問題もある。イオン農場では早くからこの導入に熱心であった。

現在では、日高農場は全面的に有機栽培に移行したので生分解性マルチは使えなくなったため既存のフィルムを使っている。農場全体では気候条件などによって従来のプラスチックフィルムを使わざるを得ないところもあるが、栽培方法を工夫するなどしてプラスチックフィルムは使わない方向を目指している。

「日本の農業は、今大きく変わる」といいます。少子高齢化が進むなか、先人が培ったこの熟練技術をどう継承し、技術革新との両輪によって、どのような持続可能な飛躍を遂げていくかというのが福永社長の思いだ。「ここまで成長したイオン農場だが、現在では積極的に面積を増やすことはせずに、人を育てることに重点を置いている。」

2017年に埼玉県にある日高農場を取材した。当時はキャベツ、ハクサイ、レタス、ズッキーニなどを生産しており、取材時の6月にはズッキーニ生産が旬を迎えていた。1haほどの畑全てがズッキーニで埋め尽くされていた。ここで使われているのは生分解性マルチフィルムだった。これだけの規模にな

環境負荷を減少させる